

3章 子どもたちをイキイキさせる農業・農村体験活動づくり

1. 子どもたちの関心や意欲を引き出す農業・農村体験づくりのポイントを教えてください。

子どもたちにとって農業・農村体験は、日頃行ったことのない場所や出会ったことのない人に会う非日常の体験と言えます。新しい世界にふれることで、子どもたちの目はイキイキと輝きます。しかし、「良い体験」「良い思い出」と一過性のものにしてしまえば、その場限りの取り組みで終わってしまいます。

子どもたちが学習活動に意欲を抱き、継続的にイキイキと活動するためには、次につながる期待や夢が必要です。そのためには、大人や子ども自身による効果的な活動の評価や学習を進める上での工夫が大切になります。

(1) 活動に対する自分および他からの評価が次の活動への意欲につながるように…

子どもたちの活動は、自分自身で「できた!」と感じ、他人から「すごい」「ありがとう」と評価されることで、「また、やりたい」「次はこれをやろう」という気持ちになり、次のステップにつなげていくことができます。

農業・農村体験において、大切なのは子どもたちが結果として、作物をうまく育てられたかということより、作物を育てることにおいて得られた感動や発見、ひらめき、ときめき、意欲など、活動のプロセスで何を得たかということです。体験活動では、プロセスにおける子どもたちの関心や意欲の変化を把握するために、段階毎の考えやアイデアを絵や文章でまとめる「ポートフォリオ」などを作ったりしますが、農作物や動物などを相手にする農業・農村体験では自らの関わりが、育てたものの変化となって視覚的にとらえられるというメリットがあります。

農業・農村体験において、たとえ天候等の理由から収穫に結びつかなかったとしても、活動プロセスにおいて子どもたちが得たもの、発見したこと等を評価することは、再度、子どもたちが活動の意欲を持つことにつながる上で重要です。

(2)目的に応じた活動組織等の工夫

子どもたちが農業・農村体験に取り組む際、大きく3つの活動目的があげられます。

1つは、子どもたちが地域の人々や環境、自然に適切に働きかける力を育てること。2つ目は農業・農村における生産や労働にともなう技術や工夫点について学び、理解を深めること。3つ目は地域の文化や人々のくらしを直接、農業・農村体験から学ぶことです。

これら目的を達成するためには、活動体制づくりにおいても細やかな配慮が必要となります。年1から数回の取り組みとする、特定の時季に集中して行う、日常的な活動とするなど、活動の頻度の設定をどうするのか？また、全校生徒による取り組み、学年・学級単位による取り組み、任意グループ・個人による取り組みとする場合など、活動規模の設定をどうするか？さらには、学年毎の活動、縦割りの異年齢集団による活動といったメンバー構成の在り方等が、活動の目的に対して適切に条件設定されていることが大切です。

2. 子どもの成長・発達に応じた活動内容についてアドバイスしてください。

子どもたちの認識発達は、年齢が上がるにつれて具体的な事柄を通じた理解から抽象的な法則性や一般化への理解へと推移します。体験の内容も、身体を使った感性や情緒に訴える具体的な体験から、抽象的な分析や思考をともなう体験へと変化していきます。

こうした点をふまえ、低学年から高学年に進む中で、子どもたちの農業・農村体験は、自分の身の回りにある生活課題から例えば食糧問題のような地球的規模の課題に視野を広げるような活動にステップアップさせていくことが活動内容の企画に対して望まれます。

ただし、これらは一般論であり、個々の子どもの生活経験や体力などを考慮して活動内容を工夫することが必要です。

(1) 小学校低学年の場合

小学校の低学年では、土や動植物とのふれあいや観察など、本物にふれる直接体験を中心にすえた体験学習を行うことが大切です。やりたいこととできることがまだ、未分化な状態にある時期ですが、可能な限りやってみたいという気持ちを尊重する必要があります。

〔活動例〕 動物や農作物とのふれあい・どろんこ遊び

(2) 小学校高学年の場合

高学年になると農業の歴史的な事柄や農業を取り巻く環境、地域社会の動きに関心を膨らませる活動へのウェイトが高まります。この時期は、子どもたちの生活（行動）空間が飛躍的に広がります。自分の力を試してみたいという気持ちを活かした成功体験が大きな自信につながります。

〔活動例〕 農作物（米・野菜・大豆等）の栽培、農作物の加工・販売、動物の世話

(3) 中学校の場合

中学校においては、今日における日本の農業や地域社会にとって、自分たちに何ができるのかを思考し、その具体的な手だてを考え、実行していく活動への発展の機会が必要になります。学んだことを下の学年に伝える、考えたことを実際に自らの生活で活用するなどの活動が想定されます。

〔活動例〕 地域の農業を体験、課題や取り組みの方向性をグループで調べる、地域で発表

〈学年別農業・農業体験活動例〉

千葉県我孫子市立我孫子第二小学校における生活科・総合的な学習の時間における

農業・農村体験活動の主な内容（平成13年度）

学年	農業・農村体験活動の主な内容	その他の主な体験活動
1年	<ul style="list-style-type: none"> ■生きものとなかよし ・野菜を育てよう（ミニトマト、きゅうり、ナス、さつまいも） ・小松菜を育てよう ・ふれあい王国の世話をしよう 	<ul style="list-style-type: none"> ■みんなで遊ぼう ・虫と遊ぶ ・お年寄りと交流しよう ・凧づくり・凧揚げ大会 ・学校探検（1・2学年合同）
2年	<ul style="list-style-type: none"> ■野菜を作って楽しもう ・野菜を育てよう・野菜を食べよう ■生きものを育てよう ・ふれあい王国の世話をしよう ・ザリガニを育てよう ・サケを育てよう ■季節の遊びを楽しもう ・どろんこ遊び（田んぼ） 	<ul style="list-style-type: none"> ■季節の遊びを楽しもう ・学校探検（1・2学年合同） ・凧を作って遊ぶ ・はねつき遊びをしよう
3年	<ul style="list-style-type: none"> ■ヤギを育てよう ・ヤギの飼育 ・ヤギのことをもっと詳しく知ろう ■大豆のふしぎを調べよう ・大豆の栽培 ・豆腐づくりの名人になろう ・みそ作りにチャレンジしよう 	
4年	<ul style="list-style-type: none"> ■羊を育てよう ・羊の飼育・観察 ■二小祭の店の計画・開店 	<ul style="list-style-type: none"> ■リサイクルに取り組もう ・クリーンセンター見学・新聞づくり ・作品の構想・制作・発表会 ■よくあがる凧をつくろう ・構想・制作・凧あげ大会
5年	<ul style="list-style-type: none"> ■二小の田んぼの米づくり ・米づくり ・米の収穫、収穫祭 ・ぬか漬 	
6年		<ul style="list-style-type: none"> ■留学生との交流 ■世界遺産調べの旅 ■サマースクール ■コンピューターによる自分史、ホームページづくり ■平和への願いを込めた凧づくり

（出典：平成13年度「研究収録」我孫子第二小学校 生活科・総合的な学習年間計画を加工作成）

3. 事前・事後指導のポイントについてアドバイスをお願いします。

子どもたちが主体的に取り組む体験活動とする上で、次の4つの段階により活動を計画することが有効です。プロジェクト学習（課題解決型学習）やワークショップ（行動型討論・計画・表現等）のプログラムづくりの基本要素とされるこの流れは、私たちが日常、ものごとを発想、実践し、結果をふまえ、新しい活動に発展させる流れを計画手法として整理したものです。

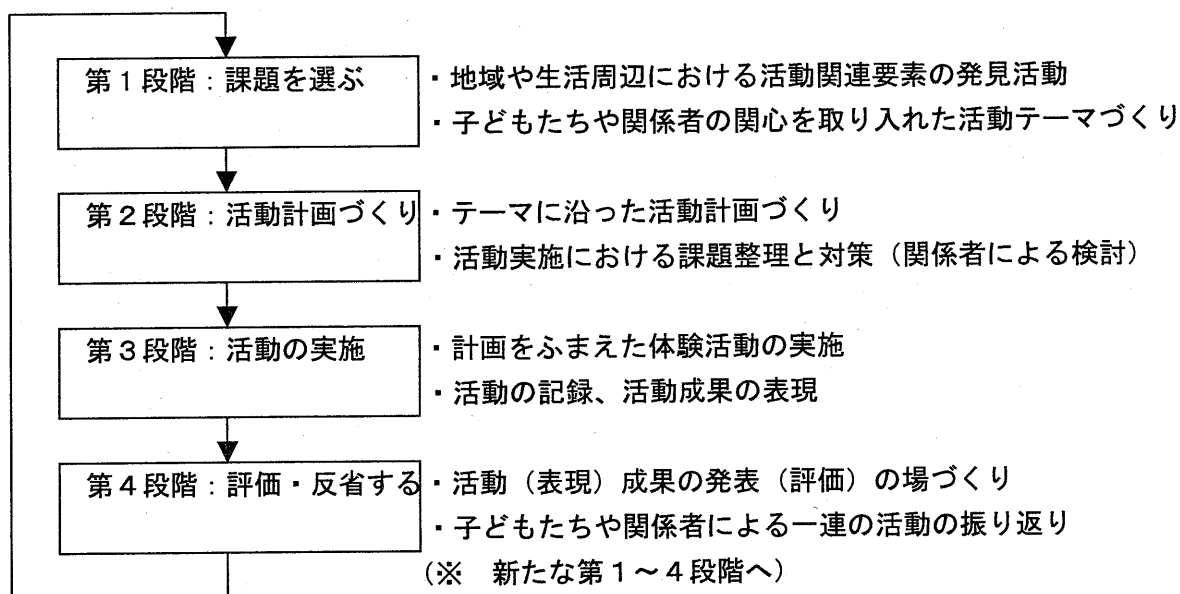
第1段階では子どもたちの関心と地域の資源の接点を探しながら、魅力的な活動テーマづくりに取り組みます。子どもたちの参加を伴ったテーマさがしとなる活動も望めます。

第2段階ではテーマにはどんな要素があるのかを探りながら、具体的な活動内容を検討し、実施にはどんな準備や支援が必要なのか配慮した実践的な活動計画を作成します。

第3段階では活動計画に沿った活動の実践に取り組みます。この部分では体験そのものだけでなく、体験したことを記録したり、整理したり、表現するといった「体験の加工」も活動内容に含まれます。

第4段階では、第3段階で取り組んだものを他者の前で発表し、相手の反応で自分の活動を振り返ります。これは成績の評価というよりも、相手に何かをしてあげて、喜ばれる、感謝されるといったものです。

以上の流れをふまえ、最後の段階において「やりがい」を感じれば、子どもたちは新しい4つの段階へと意欲をふくらませることになります。



事例 子どもたちの主体的な活動を促すポラン農業小学校の取り組み

■活動の概要

JA西和賀といわて生協が協同事業として実施している「ポラン農業小学校」は、退職した教師や農業者等のボランティアにより支えられている活動です。主な参加対象は盛岡市内および地元の子どもたち(小学生)となっており、田植え、大豆栽培、森林散策、山菜採り、そば打ち、村に伝わる昔遊びや歳時記にかかわる様々な「農」を体験するプログラムが設けられています。



雄大な景色の中で田植えを行う

都市と農村の異年齢の子どもが一緒に活動するポラン農業小学校は、「種から育て、食べる」活動を通じて、「生きる力」を育ててほしいとの願いが地域の支援と結びついて実現したものです。毎年4月から翌年の3月まで、毎月第2・第4土曜日の月2回開催され、畑づくり、播種、観察、手入れ、収穫など、一年を通じた農作業が行われます。また、「豆腐づくり」や「漬物づくり」などの調理、加工して食べる、さらに収穫物を生協店舗で販売するといった「食」につながる活動も行われています。

■取り組みの成果

毎月、ポラン農業小学校に通う中、子どもたちの心と体に自信が満ちてきたようです。参加者数は毎年、40人ぐらいです。もっと多くの子どもに参加してほしいのですが、集団活動をする上で現在の人数が適当であり、増員は今後の課題となっています。(別の地域に「農業小学校」をつくることで、活動を広げる方針をとっています。)



また、ポラン農業小学校では、子どもたちの主体的な活動を促すため、「村」と呼ぶ活動グループを単位とした活動を基本としています。村の編成や村長の選出は村人である子どもたちによって決定され、運営がうまくいかなくともスタッフの先生は、あくまでも子どもたちの自主性を尊重するようにしています。そのことが子どもたちどうしの結束を強め、お互いに協力しあう関係づくりにつながっています。

このように相互の協力が不可欠である農作業を通して、子どもたちは自然と接し、自然やいのちの大切さを学ぶとともに、人間と人間との関わり方を学んでいます。